

論文二ノ四

ベレン＝リスボン街道の遭難

ーイギリス貴族フランクリンドの改心

ポルトガルに住む間に大地震が発生し、その日私は神の摂理によって救われた。荒墟に生き埋めとなったが、フランシスコ・ド・リベイロの邸宅が近くにあり、救出されてそこへ運ばれた。摂理によるこの脱出をながく肝に銘ずることを誓う。過去の怠惰を悔悟し、神と祖国への責務を今後真摯に果して、天の怒りを鎮静せねばならぬ。

ヘンリ・フランクリンドの日記

第一節、青年貴族フランクリンドと漁師の娘アグネス

リスボン大地震に遭遇したヘンリ・フランクリンドは北イングランドきつての名家に属し、ピューリタン革命の指導者クロンウエルの曾孫にあたる。東インド会社の商館総裁の長男として彼は一七二六年ベンガルで生まれた。① 評伝『准男爵チャールズ・ヘンリ・フランクリンドー植民地時代のポストン』において著者エリアス・ナソンはその人間形成をつぎのように述べる。

チャールズ・ヘンリ・フランクリンドはサークレベイ＝マターシの爵位と領地の相続予定者として潤沢な教育を受けた。少年時代の彼について微々たる記録しか見出せないものの、明らかに精神と品性の錬磨が重視されている。ヘンリはフランス語とラテン語の完璧な知識を、そしてより素晴らしいことには母国語を明快で優雅に駆使する技術を習得したのである。自国の政治史と文学史を熱心に彼は学び、自然科学のさまざまな理論を理解するというよりもむしろ愛好した。晩年に至るまで植物学と造園術をもっとも楽しい慰安と感じ、閑暇の多くをそれに費したのである。

エリアス・ナソン著『准男爵チャールズ・H・フランクリンドー植民地時代のポストン』②

一二歳にしてフランクリンドは父親の莫大な財産と領地サークレベイを相続し、ジョージ二世の恩顧によって高官

① Elias Nason, *Sir Charles Henry Frankland Baronet: Or boston in the Colonial Times*, 1865, New York. pp.7-9.

② *Ibid.*, pp.64., p.9.

に登用される。おりしも植民地アメリカではふたつの顕職が空席であった。宮廷における一門の勢力もあって一七四一年彼はボストン港収税長官に任命され、この地位を争ったウィリアム・シルレイも伴侶フランシスの美貌と社交に扶けられ、マサチューセッツ総督に選ばれた。同じ時期に新大陸へ着任したふたりの貴公子は、豊かな教養と闊達な物腰によってまもなく社交界の寵児となった。

一七四二年の夏フランスの巡洋艦からマサチューセッツを防衛するため、港町マルブルヘッドに要塞を建設することが決議された。活気あるマルブルヘッドはすでに大陸への玄関口となっていたが、イギリス政府は要塞の建設のため六九〇ポンド計上し、ボストン港の要職にあるフランクランドは工事の現場を視察に来た。①

マルブルヘッドに滞在したフランクランドは、旅籠において非常に美しい十六歳の娘を見染めた。彼女は床を磨くというきわめて些末な仕事を果たしていたのである。その衣服は貧弱で見窄らしく、靴も靴下も履かないでいた。要塞近くの泉亭と思われるが、彼女はその鄙びた旅籠の下女であった。また、もともとそうした階層に属することも粗末な身なりから明らかなのである。しかし、哀れに襪を履き、頤使されていたが、彼女の肢体と容貌に燦然とした美の輝きを若き収税長官はただちに認めた。その巻毛は鳥のように黒くつややか、黒目は澄んで愛らしく、声は小鳥のように音楽的である。彼女はアグネス・スリヤージェという魅力的な名前であった。床を磨くアグネスをフランクランドは丁寧呼び寄せ、両親についてすこし尋ねながら、その機知も美貌にふさわしいと感じた。一足の靴を買うよう彼は一クラウンを与え、思うにマルブルヘッドの美しい下女を脳裡に留めつつ帰ったのである。

しばらくして同年秋頃にフランクランドはその町を訪れ、アグネスがなお靴も靴下も履かず働いているのに驚いた。なぜか買わなかったのかという問いに、彼女は無邪気に可愛らしく答えた。「頂いた一クラウンで買いました。でも、みなと会うときまで仕舞っておくよ。アグネスの容姿の嫵やかですらりとした優雅さ、精神の明敏さ、挙措の素直さと慎ましさが完全に彼の心を魅了した。貧乏ながら敬虔な庶民である彼女の両親、エオワード・スリヤージェとその妻メアリーに、教育を受けるためボストンへ娘を来させるよう彼は懇望した。都会へ移ってアグネスは、その地で可能な最高の教育の恩沢にただちに浴するよう配慮される。彼女は読み書き、文法、音楽、舞踏、裁縫、そのほか当世風の完璧な貴婦人に必要とされるあらゆる美德や教養を教えられた。しかし、こうした上品な教育を受けたにもかかわらず、幼児からの飾り気のない素直さを失ったり、母親とマルブルヘッドの牧師エドワード・ホリョク神父の敬虔な教養を忘れたりしなかった。

ナソン著、前掲

②

こうして漁師の娘アグネス・スリヤージェは収税長官に見染められ、ボストンで優れた教師の薫陶を受けた。天性の品性と麗質が豊かな教養によって磨かれ、やがて彼女は聡明で優雅な貴婦人としてフランクランドに付添うようになる。しかし、ふたりの親密な間柄は格式と慣習に捉われる社会とは相容れず、身分を超えた愛に非難の言葉が囁かれる。一七五一年彼はボストンから三〇キロ離れた景勝地ホピントンに邸宅を建て、人目を避けてそこにアグネスと息子ヘンリ・クロムウエルを住わせた。一七五四年フランクランドはアグネスを伴って帰郷するが、誇り高い親族は蔑視と排斥に終始し、彼女を正式の妻と認めなかった。傷心のアグネスをヘンリはヨーロッパ一周旅行で慰め、旅の終りにリスボンで落ち着いた。③

マサチューセッツ歴史協会にはフランクランドの日記手稿が所蔵され、ナソンによる評伝には主要な部分が抜粋され

① *Ibid.*, p.23.

② *Ibid.*, *op.cit.*, pp.23-25.

③ Elias Nason, *Sir Charles Henry Frankland Baronet: Or boston in the Colonial Times*, 1865, New York, pp.7-9, 12-13, 23-26, 46-49.

ている。十三年間にわたるこの日記を彼は大地震の八カ月前、一七五五年三月より書き始めた。ときには時局への所感や自己の心境を綴ったやや長文もみられるが、その過半は日常的な支払と旅行の道程を簡単に書き留めたものにすぎない。しかし、同年三月二十七日にはポルトガル「王宮へ行き、国王が貧者の足を洗うのを見詰める、」と誌されている。また、ワインの産地コラレスからは四月一日に帰り、景勝地シントラへは同月五日に出発し、二日後にリスボンに戻ったことがこれによって判る。四月九日と二十七日には落成間もない王立歌劇場で観劇を楽しんだ。① 以下王宮マフラに関する日記は、震災前の壮観を伝える貴重な記録である。

フランクランドの日記 (一)

【五月八日】マフラへ行く。リスボンにある国王の公式馬車は一二万クラウンの単価である。国王はそれを約八〇台所有する。

【五月十二日】マフラと呼ばれるポルトガル王宮への所見。麗しい樹陰の地マフラへポイント・ド・リマス子爵に会いに行く。彼は駐スペイン大使である。王宮の正門を聖者数人の美事な大理石像が飾っている。その施療院はオランダ製タイルによってきわめて清楚である。一組の部屋は一一〇〇パームであって、一パームは九インチにあたる。国王と王妃の個人礼拝堂は大理石で造られ、イギナチオ・ド・オリエヴェラによって製作された巨大な祭壇が置かれる。演奏室ないし奏樂堂は立派であり、図書館も広壮である。②

長期の滞在を予定してフランクランドはリスボン近郊ベルムに邸宅を借りて典雅な設備を施し、アグネスと息子もそこに住んだ。殷富な王都の風潮もあって、彼は次第に奢侈に染まり、自邸に七人の従僕を配したとされる。しかし、植民地における多くの高官と同じく、ポストーン不在の時期も収税長官の地位を保持し、本国イギリスでの所用にも出掛ける。同年六月三日彼はパケット船ハノーバ号に乗り、イギリスへ出発した。同月一六日フォルマウス港に到着し、エクスターなどに逗留したのち、月末にはロンドンの自邸で旅装を解く。そこでの日記には「八月十七日。イギリスでは猛暑と言う。午前九時温度計六四度」と誌されている。九月四日彼はロンドンを出立し、ふたたびリスボンへ戻った。③

第二節 フランクランドの遭難とアグネスの奔走

十一月一日フランクランドは、万聖節を祝賀する伝統的な儀式に参列するため、宮廷風の礼服で身を整えた。ポストーンでは見られぬカトリックの荘厳ミサを観劇するような気持で待ち受けたのである。教会へ赴く途上で大地震に遭遇した彼の状況については、いくつかの資料があり、それらの内容は相互にやや異なっている。フランクランド自身による証言は、救出後まもなく綴られ、遭難の状況についてかなり簡略である。

フランクランドの日記 (二)

「一七五五年十一月」ポルトガルに住む間に大地震が発生し、その日私は神の摂理によって救われた。荒墟に生き埋めとなった。フランシスコ・ド・リベイロの邸宅が近くにあり、救出されてそこへ運ばれたのである。摂理によるこの脱出をながく肝に銘ずることを誓う。

① Nason, *op.cit.*, pp.50, 53-55.

② *Ibid.*, pp.64, pp. 56-57.

③ Henry Frankland, *The Journal. in Nason, op.cit.*, pp.49, 57.

過去の怠惰を悔悟し、神と祖国への責務を今後真摯に果して、天の怒りを鎮静せねばならぬ。①

評伝『チャールズ・ヘンリ・フラン克蘭ド』において著者ナソンは、多くの史料に基づいて彼の生涯を辿るが、万聖節における収税長官と同伴の貴婦人についてはつぎのように語る。

フラン克蘭ドはリスボンに帰り、運命の日の朝荘厳ミサの儀式を見守るため、礼服を着込んで出掛けた。ひとりの貴婦人とともに幌馬車に乗り、十時四十分頃フランシスコ・ド・リベイロの邸宅近くを通過しつつあった。そのとき突然海の波濤のように大地が上下に起伏して、沿道の建物の障壁がぐらつき、折れ曲り、彼の頭上に崩れ落ちて、輓馬、車輿、馭者を瓦礫に埋めた。

輓馬は即死であった。同伴する貴婦人の極度の苦悶によって己れの緋色の寛衣が袖口から一気に噛み切られ、腕の骨肉の一部も引き裂かれたことにフラン克蘭ドは気づいた。砕かれた木材、岩石、石灰の塊の下に生き埋めとなり、もつとも凄惨な死へいまにも至ると観念した彼は、神の慈悲を懇願した。これまでのすくなくならぬ罪過が怖ろしいままで鮮やかに次々と想起され、永遠の世界への門口で彼は厳かに誓ったのである。もしも、神の慈悲を賜れば、今後はより正しい人生を全うすると。またとりわけアグネス・スリアジュと法に基づく結婚を果し、彼女への侵害を償うと。この間にアグネスはみずからフラン克蘭ドの懸命な搜索を開始した。瓦礫に埋められた狭苦しい道を抜け、彼が生き埋めになったその地点へ幸いにも着いた。聞き覚えのある声で喘ぐのを耳にし、人々に多額の報償を約束して、一時間ほどで美事彼を救出した。近くの住宅へ運ばれて傷の治療をうけ、やがてベルムに移された。

ナソン著、前掲 ②

彼の礼服を噛み切った貴婦人はその場で絶命した。アグネスと息子はベルムの自邸に留まり、建物に被害はあるものの、母子は無事であった。安否が気遣われるフラン克蘭ドを、アグネスは荒墟を越えて探したとナソンは述べる。フラン克蘭ドとアグネスの愛は身分を超えたロマンス、あるいは新大陸におけるシンデレラ物語として後年いくつかの文学作品で題材とされた。エドウィン・L・バイナーによる小説『アグネス・スリヤージェ』は四〇〇頁に及ぶ長編であつて、一八八六年ボストンで出版された。この作品では万聖節に同伴した女性はベッティ令夫人とされ、半年前フラン克蘭ドがシントラを訪れたときも同行したのである。当日ベルムの自邸で彼女を待ち受け、一緒に幌馬車でリスボン旧市街の大聖堂へ向つた。③ 王宮広場の近くまで来たふたりの様子をバイナーはつぎのように描写する。

活発な貴婦人が突然沈黙した。化粧した彼女の頬が蒼白になった。

『どうしたの。』

『え。』

返答をする間もなく、激しい震動がふたりを座席から突き上げた。ベッティ令夫人が悲鳴を挙げ、フラン克蘭ドは膝から立てなかった。

三〇秒の怖るべき中断があつた。首都が衝撃を受け、三〇年にも感じられた。そのあと不動の大地が足元から隆

① Henry Frankland, *op.cit.*, p67.

② Nason, *op.cit.*, pp. 63-64.

③ Edwin Lassetter Bynner, *Agnes Surriage*, Boston, 1886. pp.390-395.

起し、波濤のように上下した。頭脳が目まいに侵される。天空が独楽のように回転する。宇宙が転倒し、宇宙の物質を繋ぐ絆が断ち切られた。

譚妄のなかで大聖堂の高い突塔が土台から崩れ、境内の数千人の頭上に瓦礫となつて落下するのを、フランクランドは蒼白な面持で瞠目して見詰めた。到るところで円塔、突塔、小塔が砕けて地に落ち、倒壊する障壁の凄まじい轟音が大気を貫いた。〔中略〕

輓馬が立ち止った。瓦礫の山が道を遮つたのである。空中でなにかが動いた。フランクランドは上を仰ぐ。黒い巨塊が頭上に崩れてきた。

「全能の神よ、お慈悲を！」

彼は叫び声を発した。最期が来たと観念する。ベティ令夫人は降りかかる非運と必死に苦闘したのち、彼の腕を口で捉え、肉にまで噛み込んだ。つぎの瞬間爆音とともに巨塊が落下し、ふたりを瓦礫のなかに埋めた。

エドウィン・バイナー著『アグネス・スリヤージェ』（一八八六年） ①

他方ベレムの自邸に留まるアグネスは、地震の発生で街路へ飛び出した。家屋が傾き、四囲は夜のように暗い。最初の衝撃から我を取り戻した彼女は、奇蹟を願つて大聖堂まで行こうと決意する。引続く余震、瓦礫に覆われた道筋、群衆の狂気じみた喧噪のなかをひとり進むアグネスがバイナーによつて左記のように描かれる。②

疑念と不安を抱きながら狂人のようにアグネスは、暗闇と塵灰のなかを荒墟から荒墟へ手探りした。徒労である。すべてが消失し、いかなる道標も目印もない。絶望的に彼女はフランクランドの名を叫んだ。瓦礫の山々の間を巡り歩き、彼女が幾度も叫ぶと、清らかな高い声が付近の騒音を貫いた。

立ち止り、耳を澄ますと、幽かな呻き声がすぐ手前から聞えた。なんとしたことか。周りのどこからも呻き声や震え声が聞える。アグネスはすぐそばの瓦礫の塊に身を寄せ、心と胸を緊張させて待った。ふたたび下からたしかに聞えた。これを耳にして彼女は逆上したように重い煉瓦と石材を押し除ける。汗が雨水のごとく顔に落ち、埃のため目先が見えず、息も苦しい。釘や破片が腕を刺し、血も流れる。すべてを無視して彼女は作業を続けた。負われた生きものが地に潜るように、掘り進んだのである。呻き声は一層はつきりとする。いまや彼女は隙間を開いた。

「フランクランド！フランクランド！」

「アグネス！」

「ああ、あなた！神の恵みよ！勇気をだして！信じてください、いま救出します。」〔中略〕

フランクランドを掘り起そうとして、アグネスは幽霊の姿に慄然となつた。見分けのつかぬほど打ち砕かれ、ベティ夫人の遺体があちらに横たわる。作業に没頭しつつ、不幸な女性の遺体を脇に押しやった彼女は、打撲と切傷を受けた男性を愛と希望の力によつて地上まで掘り出した。鬘は消失し、豪華な衣装は埃と石灰で汚れて、フランクランドと確認できる手がかりは声だけであつた。荒墟と化した首都から最短の近道を通つて脱出したいと念じながら、アグネスと水兵は群衆が逃れた道筋を辿つていった。

バイナー著、前掲。

③

生き埋めとなつたフランクランドを奇蹟的に発見したものの、重厚な建築の瓦礫と残骸を独力で押し除けることはできない。荒墟に避難する人々に彼女は助力を求めるが、だれしも無視するか、冷笑するのみである。しかし、行

① *Ibid.*, pp. 395-396, 398.

② *Ibid.*, pp. 399-402.

③ *Ibid.*, pp. 402-403, 406-407.

きずりの水兵のひとりが聴き入れ、幸いにもアグネスの作業を助けてくれた

以上のとおりナソンの評伝とバイナーの小説はアグネスによるフランクランド救出を語っているが、王都圏全域の恐慌状態のなかで彼女が、迅速に生理めの現場に達したことには疑問が残る。ただし、同家の多くの従僕に補佐され、さらには夫の友人リベイロの助力を得たとも考えられるが、従僕の同行や友人の介助に関する記述がどちらに著作にも見出せない。現代の研究者ペイスはアグネスの救助活動については慎重であり、フランクランドが自力で脱出し、その直後アグネスや友人の介護を受けたと解する。彼の著者『神の怒り』では地震に遭遇したイギリス人数名の動静が、同時進行的に構成されているが、フランクランドの被災と脱出に関する叙述をここに摘記する。

フランクランドは幌馬車から跳び降り、ある邸宅の玄関先に避難した。振り返つて見ると、向側の建物が幌馬車と従僕の頭上に崩れ落ちた。フランクランドが避難する拱門もそのとき倒壊し、彼は意識を失った。〔中略〕

王宮広場のすこし西ではフランクランドもおなじく窮地にあつた。意識を取り戻した彼は、自分が生き埋めとなり、隣に横たわる貴婦人が死の苦悶で彼の黒ラシヤ外套を噛み切り、腕にまで食い込んだのに気づいた。〔中略〕

王都の西部ではフランクランドが意識を戻してから数時間、自分を押し塞ぐ岩石を除けるのに苦闘していた。傍らの貴婦人はすでに息絶えた。ついに彼は光の射した破片をみつけ、その方向に体を押し上げ、周りをかき分ける。潜り抜けて出られる隙間がようやく見出される。外には荒墟と化したリスボン、道の彼方には火の手が見えた。太腿に打撲を、脇腹に傷痕を受けたが、よろめきつつ友人リベイロの邸宅まで歩き、その建物がなお存立するのに歓喜した。

エドワード・ペイス著『神の怒り——一七五五年リスボン大地震』（二〇〇八年）①

ベレムの邸宅に帰った収税長官フランクランドは幸運にも医家スクラフトンの診療を受けた。バエロ・アルト地区でみずからの医院が倒壊したスクラフトンは、避難先のベレムで被災者の治療に専念したのである。リスボンにイギリス人内科医は三人しかおらず、いずれも医薬品と医療器具を喪失していた。ちなみにフランス人居留者七五名人がひとりの外科医デュフルから手足の切断手術を受け、十名のみ生きのびたとされる。②この時期にフランクランドは震災の体験と神意による地震の意義を自己の日記に綴った。

フランクランドの日記（二）

神と祖国への義務に関して、過去の怠慢を悔悟し、今後は誠実に遂行することによって、われらは神の怒りを鎮めるよう努めるべきである。

自然の災害はすべて神の手から発せられたものであり、人類に正義を教える警鐘として神意により企画されている。〔中略〕

当日の日の災厄の脅威と破壊はいかなる言葉によっても表現できない。汝自身の想念だけが汝の心にそれを表象する助けとなる。思うだに戦慄する。広大で殷富な都市がいわば一瞬で倒壊と焼尽に至り、矜持と栄光もろとも全面的に壊滅したのである。大地が中核から揺れると感じたとき、家屋や教会や宮殿など周囲のすべてが倒壊するのを見たとき、危険から逃れるなんの望みもなく、逃れたとしても身を護るため避難する場所がどこにもないとき、瀕死の人々が叫び、呻くのを耳にするとき、さらにはわが友やわが子を失った惨めで哀れな数千人もの艱苦を見詰めると

① Edward Paice, *Wrath of God, the Great Lisbon Earthquake of 1755*, 2008, London. pp.70-71,

76, 110-111.

② *Ibid.*, p.126.

き、いかに大きな動顛に襲われるかを、汝の胸に手を当て、考えてみるがよい。①

アグネスの献身的な奔走に感謝して、まもなくフランクランドはカトリックの聖職者のもとで結婚の式典を行った。やがてパケット船が再開され、フランクランドとその令夫人はこうしてやがてイギリスへ出発する。船上ではふたりの絆を堅くするため、自己の宗派の聖職者が立ち会い、もう一度結婚式が挙行された。帰国後フランクランドの母も彼女を嫁として認め、家族全員で歓待する。さらにウォルポールやピットなど政界の重鎮を擁する社交界でも、漁師の娘アグネスの容姿と挙措が感嘆の的となった。翌年の夏帰還したボストンでフランクランドは収税長官の公務に再度専念し、令夫人は社交界の明星と讃えられた。

フランクランドはこの年の夏ボストンに到着し、愛らしく才芸豊かなアグネス、かつては軽蔑と冷遇の的であった冷遇されたアグネスをフランクランド夫人として同僚に紹介した。そして、まもなく彼女はボストンの洗練された社交界で第一級の明星と認められた。〔中略〕

この高雅な邸宅に准男爵は令夫人を住わせ、当代のもっとも優雅で魅力的な女性として冬季には彼女が宮廷と都市の名士の会合を主宰した。とはいえ、貧しい家から社会的指導的な地位に登ったにもかかわらず、フランクランド夫人は下層の階級をけっして忘れず、家族のだれにも親身な配慮を怠りはしなかった。

ナソン著、前掲

①

初稿：二〇一四年一月二九日

改編：二〇一九年九月七日

① Henry Frankland, *op.cit.*, p67-69.

① Nason, *op.cit.*, p.65, 69, 72.